

第 78 回 和歌山県皮膚科医会学術講演会

特別講演

演題：「IL-13 製剤 400 例の使用経験からみえたアドトラゼのつかいどころ」

演者：日本医科大学 千葉北総病院 皮膚科 講師 萩野哲平先生

アトピー性皮膚炎は、皮膚バリア機能障害、慢性炎症、強い痒みが三位一体となって病態を形成し、患者の生活の質を大きく低下させる慢性皮膚疾患である。病変部では IL-13 が主要な炎症性メディエーターとして作用し、炎症の持続や感覚神経線維を介した痒みの誘発、さらに組織リモデリングの進行に深く関与している。このため、IL-13 を標的とする治療は、病態改善に直結することが期待される。

当院は三次救急医療を担う病院であり、多数の生物学的製剤を導入している。アトピー性皮膚炎患者も多く、日によっては外来で非常に多くの注射を行い、冷蔵庫の容量を超える状況となることもある。診療は複数医師によるチーム体制で進められ、薬剤投与や在庫管理は看護師と連携しながら安全かつ効率的に行っている。

アドトラゼは可溶性 IL-13 を中和するヒト化モノクローナル抗体であり、バリア機能障害、炎症、痒みに直接関与する IL-13 を標的とすることで症状改善に寄与する。当院では導入期・維持期ともに安定して投与可能であり、投与方法は初回ローディング後、二週間ごとの皮下投与である。デバイス操作は容易で、看護師による説明もスムーズであった。

臨床的には、生物製剤未使用の患者（ナイーブ症例）において高い効果を示し、多くの症例で痒みや皮疹の改善が認められた。特に頭頸部病変に対して顕著な反応を示す傾向があり、顔面病変を有する患者の QOL 改善に大きく寄与した。一部の患者では効果発現が遅れることもあったが、多くの例で 16 週以降も改善が続き、48 週や 52 週といった長期治療で確かな成果が得られた。投与開始から二週後に肌の質感改善と痒み消失を自覚する速効例もあれば、半年以上経過してから急速な改善を示す遅効例も経験しており、効果の発現パターンは患者ごとに異なる。重症度が高い症例では痒み改善が遅れる傾向があり、中等症患者においてより効果が最大化される印象を持っている。

投与中の安全性については、結膜炎の発症頻度が非常に低く、重篤な有害事象は確認されていない。患者の脱落はほとんどなく、高齢者にも使用しやすい薬剤であると考えている。頭頸部病変の改善は他部位と同程度で安定しており、長期治療においても改善効果が維持された。当院データでは最大 36 週から 52 週にかけて頭頸部完全消失例が増加し、特に顔面病変を持つ患者から高い満足度が得られた。

当院での使用経験から、アドトラゼは中等症患者で最も効果が高く、頭頸部病変に強い改善を示す傾向があり、長期的に継続することで効果が高まる症例が多い。効果発現が遅れる可能性がある一方、患者と医療者がその特徴を理解し、治療継続を促すことで改善を得られることが多く、短期間の結果だけで判断するよりも一定期間の経過観察が重要である。また、副作用が少なく安全性が高いことは日常診療において大きな利点であり、外来運営に支障をきたさない。こうした利便性と安全性の高さから、当院ではアドトラゼを患者と医療者双方にとって使いやすい薬剤と評価している。

今回の経験から、アドトラゼは当院におけるアトピー性皮膚炎治療において、頭頸部病変を含む症状の改善と QOL 向上を実現し得る有用な生物学的製剤であると考えている。特に安全性と長期的な効果持続の点から、多くの患者に適した選択肢であると考えており、今後も継続的なデータ収集と検証を継続していく。